濫觴無底抄

うすくも

特別
へ12
1077
20

早稲田大學圖書

刹
1077
1-4 20

薄雲　内大臣

卅歳

大井里冬住居事

明石姫君可奉渡二条院有悵事

十二月姫君奉迎二条院事

同著袴事

卅一歳

正月出大井給事

源氏引箏明石彈比巴事

特 へ12 1077 20

摂政太政大臣薨事

天変頻示事

三月入道宮御悩事

行幸三条宮事

入道宮崩御事　三十七歳

法務僧都依夜居之次与主上御物語事

主上知源氏御子事

桃園中務御宮薨給事　元為式部卿

源氏可任太政大臣之由有御気色源氏固辞事

秋加階并聴牛車参内事

権中納言任大納言兼大将事

王命婦任御匣殿事

源氏同給事

斎宮女御出二条院給事

住寝殿与源氏有父子儀事

源氏参二条宮女御方御物語事女御好秋事

入渡紫上西対御物語事　女君好春給事

渡大井里給事

花以歌為巻名

薄雲

河原ノ院之

入日さす峯にたなひく薄雲ハ物思

袖にいろやまかへる　以此哥号之

又網云雲ハうすくたなひくともいへり

ともあり詞ともとりて名とせりとき や

源氏卅歳ハ冬より卅一歳の春まで有

みえわ

夫ハ名以哥号之松風と同年之卅歳の冬

より卅一の秋まて此事あり

名にたかき川またに河はしの名も海井

花
これハ大井の里の事之

武蔵流名にしこれハ川風寒しら流砂

しもまた心はそれさ海之

うハのそらなる

桜
明石の浦の明石の里をハなかれ来て渡

もしかしかし頼くゝ之

君も我なくてハ

源ならまし

かたちこそ深

二条院ノ東之　花洞

はしきこ不ねむしころつくそてんも
かりそあるすの事ハ給ふ女ふたりなる
男めてたくてハかしこくなき事なれハ心さし八
またおりえさらうなぬとおもれハ事をもて
めちけりなんてさりけまハ女
扇をかへてまいりてみなとらぬれハ恐
き、事乃おほへとある事

秘

後撰十一 同河野也 此頌本なりくこてよみ侍れとも
かりことをつき不きうへにとめ座上にハ二
条のひ東院よりてし源の物さ源れく
おし給りしに乃心之

弁

宿りて一

私大弁ハ職をうれハかきしなりかたては之
職ち盛てれしなりハかしつまを不ねなりつ
かりへられハ給まき不おもし心しそてんなり
あさく心ちとへさしハ之りも同日をよりて後撰乃

閑出よりくる女ハつくさ雨を心ぐるしくてくる趣
いかにひてなしいやりよ
河拾遺 うしみて其後さ人乃はしらハいかにひ
てゝ孫をとらえへよ
私奔 同奔らり
私云 奔其心のやうよ明石上歌ららる随之
かゝハこ乃まゐ君を
二条院東院へいましう中まきら小姫
君ゆりを紫乃うへにまかせて源のみ之

かくて乃こハひろきさまなり
秘 中宮ならしよハ覚をゆえにはまえくゝ之
ゑいよきくをとさて
秘 紫上之
あゆき其事あるし
閑もさし 云し 私尚
明石乃姫君く女御の事之 松風巻に其事よ
奔 はしまらしみらし之
一勘 大昭三歳時有之 但五歳以上例又勿論也

花山院ハ九才ニテ着袴ありし恩案抄勘四匝に

此を除きて此事ハ明石姫君事也 女人の勘例

ある也（未考）

私一勘ハ釈王着袴ノ例也

されかたきんとあるところ

明石上也

明石の上也 紫上の養子にしまいらする（さま也）

あるところとハ遣しさやうよと思ひしとぞ

何ゝたちてはんとなきさうらん

秘

紫上ハ御子もまうけ給はぬ事とも物の御腹なき

ては人ハかしつききこえし也

私人ハとりきこえし事ハやはらかに

ことハさやうにしくしくもなき給

いよいよ実の御母になりかはりたまふ

とぞ

もろかたく

秘

姫君をとりたてまつりし明石上の心さまを源

氏のきみのよ心 又武家小ハつろひてきえさ

秘

まへとはかゝらくしといふ義あわれ也用之

源乃いとゝ思ひ給ひへよるへき詞よ出るへく

しるし之

私此物し義はやまれり

とはまとふハあまり

明石上乃心中を案して源氏とハかとも申よ

哀とくと之

うしろやすくしぬへきには

源の詞

秘

自我継母なとのことをいうとハ思ひ給ひ

そし源氏の給ひ之

かしこにハ年へぬるまとしうかへしもちやきか

秘

紫上之　も紫乃腹よ子なき事をいう

前二東宮乃たまひ物しみたとに

紫上ハ年比は子なき事を歎き給ひ子供

あしけと之　紫上ハ此乃御子かたみにうき

之口ハ名のり此子あしきの国を歎え此の

紫　御事とも可勘

弁
紫上ハ六条院ニ東宮ノ扶女房ノ兵部卿宮ハ賢木ニ出
紫上ノ継母へし紫の上をあしくおもひ
まハおもわしきこと
みこころけるを
明石姫君乃あいしきことハ紫の上
女君ハはゝきさきのおりよりやうあり
抄
紫上ハきさきをとうりなき
いふ人ハいつくちりに事まさ御かたへきこえと
明石の姫君ハ源の御心ハおちさきは人一人よりきこえと
め絵ましくなるかなひめ君かきよりて紫
上一人よりあるハいつくありぬ人あらもゆうしくなき
数ならぬ人乃子うひきこゆへき
抄
明石上ハ卑下之
私云ハ惣おれ人のことハ紫上になをとさらぬ人
乃立ちぬへきすもハおいたされ明石
上て源のれおほひ人ハ中宮ハ姫君なきも
出来ぬ人ハ何とかに立出てといふ也
人しめさ御しく

是ハ師匠の我身を自讃にハ何も能あり
みな神の人様に立いそうハ堂の峰に於
ぬさまりしうう見れへしと也

わか身ハとてもとてもおなしき事
是角我身乃事ハ打おきて姫君師匠
是をとも師匠上の之子也

おひ行きさ残き人乃御かし
梅
姫君の事也

はかなくハかのゆかしよく無さき
姫君とはかなき葉のゆかりのありてハ
成まりしきうしと也

ゆうとこうは
さうかんとうあうりをし子細也

かうう九我なきかとはや
姫君乃何の分別いうさ時世上へ出り
無のまりし成へしとも師匠乃上の不言也

又てとくれちて
是ハ神の上の又川なし姫君とちから

くゝき事を多して小文字也
うしろさかさん事つましもうきむとく
なくてハいくハはしくてもとくうん
光よりうちゝくうさ事ハさ海光ハ流
うれしてハ此ときうんすつまてうさむ
為くさうん事又何はまてら源御
三よ為しはん机かまくさんとこ字
事ふりをき海くよるのみさうきょ
ありはけてら

秘
姉君をとゝめて八源の為頼のふ事も
はりとくこさとえ
あ海君はおもれハ中りゆき
秘
をとゝめのへ
はちこさなし
きくり尾云れ姉君をと葉上へまうしゝ給へ
こき事をさ海く明石の上にハ北さらにすう内お
ちうさ形しハ云為方之 七方々モナト下云同之
はなふこのれたあ

姫君の母なる之
あさくれほして
源氏の浅くおもひて此事ふてハかりしと之
母きさきみからのはこともきこしたれ
め花
朱雀院ハ延喜第十一村上天皇ハ第十四皇子
おりゐさせとも也母后ハ中宮穏子昭宣公女よて
為平しかりて即位ありし也西宮左大臣
兼明親王ハ第一皇子にて賢才也

さとも更衣腹なりし故に人臣となし給へる
それなき例をいふにや
抄
このたびのまつりごと世にさわがるへき
朱雀院ハ延喜第十一村上天皇ハ第十四皇
子にてそれぞれつゐさせ給ひ母后穏子なりは
て位をゆづらる也今源氏ハ更衣腹なり
て位につきしはめづらしきと也
故大納言の御むすめひときはなく
按察大納言の又按察大納言の北の方也ささ

みとハ大臣より外の事をいふ
大鏡云三条院時に后に立給ひて後
と見えしきのうちにハ大納言の女にて
后に立給ふ事いかゝありけれハ後ちに大納言を贈
太政大臣に成してこそハ后にたてさせ給けり

御してゝ人(タヾウト)ハあらしへき事なと

源の大納言の女腹之御后上の事ハ
申しいかなることも事とはなし
又執柄よみしもの御子たちなと以下も
親王皇女なとの人腹の事ハ不足言也

又みこたち大臣乃流なとにいふ

或みこころ大臣乃腹としてとさむかひさ
承れ腹ありてハおとり腹と云也けれども公家
明とハ本妻の心あ腹の半本妻腹なる
おとり腹とハ妾腹なれはれ事
けしからひさる

秘
本妻之事　おとりの腹ハ人にあなどられしさ
おとり乃腹

秘
落胤腹之
私通腹ハいやしき女に通して大臣なとの
女をあつかふ人にて宮中ニ親王にも
大臣なとと腹ありの人ニ其外ニてもおとりれ
腹とハ其又なりし大臣親王乃女まても
本妻と本妻のあねとハ人の心とちかひや

まして是ハ風んとなきされくよ

秘

抑つきは服よりといいてき治りけるとまふ也（まこと）
彼是らり八明の上の事也と云之此詞よつきてこ
ま八上の詞なりよかくしよみし人とさる人
の中よ同し大臣也むきとめなふひて深き心も
おもしろくもなきぬとも花見よて桜を
柏せ侍て明日上司とハ宮中へ（ハ宮のうちへ也）
と尼云乃喜多之とんるも此歌了般也

おもしれぬりしめ
殺ろともし使るまへうる子の別世慶とも

ゐの柏之上源よ姫君の女房のこさ時と
こしたまりてもそうしつる絵の深く思
ままみえとおほしたしと思ふ御心

何乃之人のおん
河人 葉 無見 日本紀
ゆうきん乃心ろらもと柏の世也
くこえん柏とハかねてそひよきと思ひ
うつえ深しるきけり 月のこれなれ
武兄乃ろし八撫量をも之柏とろ撫よる心

如何

私さうしき人とハ似しうて抱と指し

うしきる人といえ

思ひよハ筆とけり

秘 明石上之

まうしまんととよそえよりなき

殿と君なりうしたいし人ありの源氏

秘 明石上乃思ひん所とまうしひゑひてれ

ろ海まうよ字ゝ世てれる之

志井てもえれ給へく

姫君をうしなはんとちかきて八之の

あひつゐハさね之

いかやうにかし

れもうりの字をおして八せての給へり

もの川の字のひかきを君よ

明石上をそすの御返

我身のひかきにえてもいとこみきりとて

まとふみちてもいはさかへやまいはさなり

あるよし源氏に花給之
こゝまでもいらへもし
紫の上はゆかりなる人にまかせてともなく
世界りして以る之
いとゆかしれは大ほと
源乃心
日あしうせ行て
姫君は二条院へわたりまゐへき日之
ゆくへき事あまたとさきてさせ給

姫君をうちまもんは源の御心まうけ之
あらきこえん事ハ
これより明石の上乃ぞ之
よかるへき事をとそりし給へと
姫君はいみさきやにと花ひて返
ふたと之懐出へる桜の色之
父わしてをと
姫君乃乳母之
いとゆかりきこえし事をさしそへりへいらり

たけき人に事よせてなく
いみしハはつかしけなるしと　弄
尤もうしとハ明石上乃心なるへし
けうさきにや　乳母乃詞
秘　明石まて下りし事を縁よせていへり
はらんとも
こゝろのはれ〳〵しく
明石乃上の事を云
うら〳〵とてきこゆるすへも侍し

はかなき文をかはしゝ事也
うらなきけしきとそ
姫君をとらしまゐらせてもなきとらう
かやうにいひてわらひけしきをなす成
雪ほとけらる心なきさまに侍りて
姫君の御事をとふらひをきてる事を哀み
はてれはかねるしき時によろしくうき海を
付てみつくしのこと成りけしましとかきいらし
てらふ心にはそ涙さそふさうてとおもひも

しるし

はやしうき海くに物ふみへたてまつる

明石上へ心

明石まて源氏におひおはして侍りて

此海京をとうけさき文ちへ乃返りれを也

さてく名も海ちるるさへおもふと又姫

君よりさへくおもまん事をいふ

これ乃君と　　姫君之

雪かきくらし　雪はなる

雨乃さ海を思ふ海之し

あら先ぬさる御りぬいうしらはき

明石上のさ海をくれうとゐ

かきりなきこへと

位さく御んとうさへ人の事をいふ

冬りよあん日　秘

月未乃事をいへり

姫君を紫上へまいらせんハ何此

事をとこふりやく

らうゐけよゝらなきて

明石上之

（明石上）雪ふかみ山乃みちハはれすとも　なほ
かよへあとたえすして

秘　明石上乃哥之　ふしかゝみをたのせり
乳母とふみかくる之
心ハみてありたしとおもひ風之

（乳母）雪なきさらしれ山をたつねても心の
かよふあとたえめやハ

秘
雪ふかきよしみく山乃りとゝみかよハん
とゝめのとのみのふみこのあとふ文あり
をかへしけり其日より此山ふミことゝいふ事
松乃此山ハ雪深き所よりひとつふれハ
雪乃なきさとハこれ大井乃山里のみ
山乃やうよみし所のふかき事もなけれとも
心ハかよひやまして此大井のさと人ハ跡たえて
ゆきみれとわかいひさへむとハいへり

夫乃雷をこしらひてわたりのへを
抄 源のまはりの事也
まいハ海ちかきこゆり
抄 西向也
さかしんとたかゆらとなり
む よ乃つ姓を源氏君をとまちかきこゆるをて
仕ふまつり給へるハまつ君おはしますを
抄 思ひてもまつつれなるを
さらに光そおはしまするつきさまへ

人屋りなりとたちむ
む 人乃ちりわさぬくもうまさ也
抄 我心さりしんなうまつ也いまひゆとさて
こうのおしき物をと也
まつ似よりそはつめいあひさこうんを
明石上それ思ふもなきうし我心得て也
今ふらくもいるとかしさんよハ夫あてまうし
給りしさやまる海も思ふも一夜らけひき
かてくハりんいろくまさし事しやなる

かつまや　　　　　　　　　秘 妹君之
いよりはくちきはらく
そのかれハ思ひかくさりけり
なをさりの人まてハ别とも明君のかりの
ひゐとをとらる事のあらんとあしきりとこ

おのきりあつもとはくしの
秘
髪をとこさの　事 かくしをき事や

何ほうこのはしめて
何 かりそれの事や
かうこのおもさけ尾の髪かとらせ
よその物に思ひやらんかとれ心乃中をもかり
源の心に此妹君をとゝあちの結ひ明君
上いかちのまとらんとしかの結ひ心のさ
よろこひの結ひ明を之根一夜さ海の結
成へしうちかへしぬのをハいふとあらハ
はましみてもさき海し乃結成へし

此義同し人の詞ひ飽ハト云義なりこれハ
何とやらよ夢とも人よ拘るこれまことりう
をあつとも云ひ之 此まうかりとも又三の詑
へもそんとも母上れ公認もしはそうる之
まし 不用し

花

あつとそわの君と添し人をいひもとめお待
らと我くらかしさ添もうとをて
おさせ給りとも
私足ハちらくしのすよ 何もそれ

らかく口たしきとの海きこりとこ云義
此所不書

うたかくらおかきみれ

抄

明石上の詞之り末段へさき事也人奥
海しまさは之
くちたしきこみれはとうとそし八我お
俗性よひとまて姫君をも人の思ひをを
まくきもと書乃上うしの似合て何の給
りし組へき事あれハ何をもハ乞ひ給こ陀

おしみひくくらあくとや
姫君ハうたゝひまたなく御車にめさん事を
をさなき人のさ候之
若君ハりうしいさゝて
桜
明石上ハつ孫ハおもひの人なりしかハ
まられみてまつりけれハさらさうまのひ
作りぬさ候を沙りれ之松風の音よ金
ろとりさいて見えけるかされ給ひ昔の藤
小ハかさなり取四五へ一寺日

かたられ誌ハ
姫君のさ候え
袖をとらへてのりまくと
明石上れ袖をとらへて車よ乗まくと姫
君れのますへ
明石上
五条こをさき二葉の松よ川ちられりのさみ
うれかけをみるへき
行末を祝しうや　心ハあつ之
えもいひやしと　いうしうあくさ候

タケクマ

ゆふやみかくらし
源の色也　松されはこそと云心也
臣原
たひらめし詞也あらまれハあまく海の松に
小松の子世をとうへん
花
武隈乃松ハ二本あれハ岩上と生上此
二人に喩へてさきの奏に何さきて禄
さしゆへやいと尾上のいひしとうしさ
めて根もあられハとよみあり
松
松風まてよ何さきねさしゆへやいと尾上

乃いひしをうけてあきさんなくに此心也
花為説可然
武隈にハ松小小松とハ生乃君をうへ
て二本の公にや相母とうりうへきとあるおり
私奇為奇ニ非須ナ乙可為
因松に小書ハ明石上にて姥君と之説ニ尾ミ
私ニ用之也
乃ちにをとし
源の明石上をとおしさあふる何せ

ゆるハたゝほし

明石上乃御車ハさハ四足ひきつゝけハ七ニハ無

ひろきさし

姫君とおほして

乳母とおなし心人ト二人御車よのる也

流石之何乃まさり也乃物

御劔之不限男女綱紋之 尼児

皇女乃流石しと具をとりてすハ陽明

門院なりの車之御ハ何まいらせしやれ

成給へ小児三筆まて見えと申ス筆ヨ

もとこ従よおもふきもしあひ之天児作り

物よくし小児よそふる物也

人々女中ひかへてきまうの人(ワカウド)

はこの人の車ともの女房たちの車也

人給(ヒトタマヒ)　副車(ヒトタマヒ)　私副車ノ西字訓点ホ秘抄ノ表紙ニ三光院内府ノ手跡ニテ注之但出所ヲ不注し

人たまひハ出車し給人ならの時の友礼ノ

人かたの車をも匙して女房なとものゝる

車へ出車トモ人給ともいふ也

よろきわゝ人ゟハあとのをてれとらりよ
そのまし姉君ハはさきまろもある人
尼乃ほとりの山とらりよ集ろめる
みちもうしこゆりはつ人乃
秘
明石上乃事也源の君さまりも明石
の思ふへきと也
法くやうゝん
人よ物思ハするハ罷業よ成こと事な
我なく源乃外也
ぬなうひさら外ちとゝといかゝしたまへや
秘
こゝろしくしこき所也と海井とく也
思ふまし也
みしもよてをとこに
河別也
秘
二条院のにしおもて也領なきやまし
法うわすれも之寿日
まつ君ハみちにて孫給よまり
孫君をさきゆへたさきなうき人の孫君の也

うちひうこ

姫君乃さ侍なきさまをハせてうちまあ
はこる神之こゝさめうれてかまへり
子とありハ紫上乃流と成し
山さとのはまくゆ侍してゆたに

秘 源乃氏や
明石上の事を思ひ屈りまして
私常よ之はひしき山里分れハ姫君
のたらせぬ歳小侍してとまりり

ものゝはひさう氏ち

秘 葥合しさうと
いたをや人乃おもへきこすがこ事人ハ

秘 源の氏之同しく紫上乃流族まておもハ
思よ下しかましきをかるを同しくハ
紫乃流族まて二のまへうしさまとみきまて
はんの氏之何とやん色ハ母さ成男か
なと思よ氏おもへし紫まハ色へうとと
志りしる人てしりとあて

又姉君の返し大弐にてかれしへて
とあつめけや
秘 心やさしくもしれ心の返し
此姉君の心の返今よりあるまちやか
まうしたハとせ
又は筑紫の返しのくおハ云れハ姉君のく
やくたまへ給ていろそ
武筑紫の流れの返しの事云し
私此義了簡之

又年へとなきさ人の
又乳母をとこそくへのまゝ之
流しの給きハ何つりわさとたはしいのとハ
かけ遣とし
秘 別に縄宮も見てさる之不動尊人
まつひ又流しつひのきのつつくさ
川の事ハそのさハよひちめり
今てゆすもかしとせ
流しつひ宛のかへ何そひれ

これらを海に入れ潤渡みなとの事にて
さしいりあへるまうりうところも
哥 明石姉君は時さて来たる女と共に
人くの出入ひまなきを以てなり
姉君乃母もうち川ゆひあへる
手繦(タスキ) 日本紀 古語拾遺 襷襷 一説 織成襷 續我諸記
和名多須岐 延喜神事式云表裙 襷(タスキ)
襷(チハヤ) 一説云玉章繦として袍乃上(ウハモ)に玉をかさ
りてかけるなり女は常に云えと蜂乃比礼

蛇乃比礼みてと云之ゆえにかく本綿
を繦とするをも云也古語拾遺以蘿葛(カツラ)為手
繦れその長き絹布を着襷の頂方あり
包 玉さらときうけぬ時なくまれに来て
礼しかるハぬきてもえん
花 河海よ川のせうちみな綿まの別にしよ
哥 私おとえしりたるあまたはあり一動
今世無存知人頭秘なり
秘 花鳥よ志るきり別勘の中なり

大井よ八はさせん　明石上為公
勇丸をころりと　秘　明石上丸好梅をうま遣
同二条院へまいりまするを因りける

と後悔さし
武勇丸をころりと八源氏へ参たまいりき
すをあひまうし好若をまゐりけしか
く川なふし手立とかいしお手八と
かひかことしはなや
私武術ノ義して誰れ
わぞいびしか尼若と
尼きこし丸を打ちれこまここてまいり　杖
まぬてしおりましよ八いびしか今八源氏へまゐ遣

らましつりまさり　尼君の心
みな事とも申しこゝろひ
秘
明石の上より君の寿作之
何事とも申しとは姫君の方へハ宮つまゐれ
文おひなとハ早下りしてをそれ給ひつ
ここて年つもる女房ともの事之世におほき
なまめいたるなどもとりとゞ之心津ハ面白
海ちと紙あそんも
秘
源の御之姫君それまし海きぬ庵すまき

こしのうらふ事あひて
大井へ源の御出之十二月十五日へし
いとさひしきを大井よ
是ハ姫君をとられしまさなひてくれは
乃地おの事をいひて
さひしきんをとかくさあんとてまくへしよ
まみのとゝしつまとも御まなこしめさ

女君をいはふとに
抄 紫上之
うはへよ人にはしめして
紫上のひめ君をうつくしみまゐらせ源氏
石之御しみのかゝみともおのやうに
み行いはゐとき之
せしもくやりぬ
武姫君四歳
源氏廿一にて武蔵守へ
秘 源廿一才之年月

まつりはとひ始める人の 秘 余賀之
おとゝりしふるかるの八七日の流れかるこひ
花 正月七日のいはひをいはへし
年 年始の礼の事之武ハ七日あたりにやり
あまへしもとへし
ちとおもおかしきへ人ハ七日年ゟ余里と
あまえ
閏七日より余賀ありと云又七日つきの年
賀し云あ説ありしが義不審

うつほこりうた

秘 天下太平の時ふ之月ふとりてハ諸たこ
の楽ハありめでたう人ハ男も女も楽まん
中比御ひ之当時の聖代をいふり

秘 前んて此院の名ハ乃此やうこ

花 花散里也けり

二条の東院の西對よとみすゑ

ちりさきたまりハこよなうて

秘 明石上ハ雅なりし光ハちりさき故よ知に

もとよりわかうで
私にはおもひてとハ雅のちりさきまきりハ
事なれちりよからぬ事とも

わさとハ見て雅なれ
今ハうちとけたまをおもりてこ物なか
とりで雅なとも

今流見た為のこころなれ
語 あるめさる勿論之臣めでたき大やかに成
や 私臣乃字可用し

かゝりれまくせ
　色葉乃哥の説を思ひしるへ
於ゆるれ流の説をさして
　源氏とりの流にいつくれさ海の葉よ
　さめしとそしけれと
けいしとるし
　別當南東院まての事之一勘点よりハ
　新絹無取見入家司もしあり事之
　三年無りたり（けりしり）めたり

山さとのはまく　御名上乃事
物さハりしきこなと
　公事政以下まさしの流義なとし
時しりの流るは絶しよ
　常の名れ直衣
　（む）つ稼の直衣のらしこきき模芳臓を櫻色
　とハいくり下乃櫻への前よ縁ある文
　盛一し　世へハ流いとゆへ
涙のしまらし

女君こゝろ深く　常の御よりて出立
とはせ給へりけれ
秘
姉君れ志らひのまさり
一こゝろ　国篇外文　桜篇盛
こゝろをさきて　姉君をとり〳〵のまさり
何をかへりなんと　桜人の歌　弄月
左久良比止曽乃不祢千々女之末津太乎
止万知津久礼留見天可戸利己牟也
曽与也安春可干利己牟曽与也

底
己止乎己曽安春止毛以波女乎知可
多你津万佐留世那波安春毛左祢
己之也曽於与左安春毛左祢己之
也曽与也　催馬楽桜人

歌
桜人の舟とそれ舟ちとめはさはめせまし
さうしはやくまゐしもの心

箋
舟ちゐもりをこゝ人の舟はそ何をかへりこん
せめとゐもみめ
花
桜人の心をもみ給へりとこゝ人は何の

河
水表 ミナカミ
遠方
日本一

彼方
三上河海

上に要あるを
撰人の心にて書なり明石上をさす方
人よめしていへり
撰人はその私にかへると云詞也上句をさして
よみたり母とむすめとハ源氏と明石上也
こゝろ也とそ
或撰人ハ女人なとしいふとし蕉人とも云
更しそれ母ちゝあハ其ハ女をさす源氏
ことしハ源に女之源をさしへ云也

何りえて二條ハ女よりてさす也
さとをとして河をとをいふあハ詞よりそあ
をハかへりえとハ父とハ女也
私船ゑむちの河をかへりえ世家をさす
女治撰人の詞をよくも云へりさて
かいひかり 河 世家まて見 日本し 肖男方
いさりされて 中ねのさ侍し
ふかきひやうにはしらて
源のさ侍し

古源

ゆきてみくはなもさかりん中〳〵よそち
さく人そ心ともとも

古

源の古き之はなハさやく咲きたえんよそ

秘

さうえんとハまくまんと之

本

あとともさかりこしとい桜人の詞よ咲つ古の
の心め花の上ハ咲く心をとしもはなとか
へりえんと之 或説云あとハさや咲ん之
私ニ 只あとかへりえんと成へし 此本

河

早来之ゑらくえん之 又云實来ヽ とよえんと之

伊勢物語にて詳ひさかりとおほくハあり
ゆとあるへくと心之
閑さうえん桜人の詞なりえんと 又実の心
にし花のうへに咲る植よふを方人根ハ中〳〵よ
いぬもりもなくゆくもはなハさや咲えん
と業平を源切よ思ふりとこせふり中
くみとハゆゆくゆきてもや咲つ待く
このぬもりも恨あるへしと云之 あすともも
乃字ハ桜人の詞とそ承りさきさうと之はなと

はやくゆうんとはなよみる〳〵
うたに事とをきくもろて
明石上乃事ゆへかく紫と源と争ふよ
みとりこのみをも姫君ハ何とも志らぬ
らんハらはくしみ
姫君を紫乃慈悲之
おほしゆるされけり
明石上乃事をも是非紫乃思ひゆるし之
一
いかに思ひおこるらん

秘
紫上乃思ひ度之
まれなくいとしうまつしうりもぬへき
紫の明石上の御事を察して思之とも
れまてハ我身おもして之
かとらたおしくハいてや
秘
此前乃女房たちの之
紫上乃実子なくまし悔さハ之
かしこにハいとれうやうに
大井の家を住ふて紅おしらる之

みかりけるひなし
光より明石のさ巻之　源の心
尓よれつ程のたはふれ
弁
明石上れよめる歌也あるハこれ程似く
浦しくも思ふまし明石入道の娘なれん
取りりとも思ひ明石上れ入乃様子
とハ浦しとも思ふまじよまするを人かう

乃れ仏ふ入ころゆへよみちゆる也
くみけられるまと之
秘
明石上れよめるつ程にて何にハこれ程なん
乃うしくも思ふまじきまとと之
浦の尓なし歌へ也りと
明石の太きこの人なくあるハ比娘君を
まうれさくまりもうして明石の上とハ寸
をこさ給へりとも尓あれなきくそ何う
ましきおもとと之

同此明石上よりのつゝきの人なるハ光ほと
なる人しハなきへしされハ入
道のひかりの威勢かくよきとも
ちからか不審よ此ハうたゝ人のかしハ雖
式ハなれ共のしよ変化の女なれハそれ
方隣なとにあつひなともさうなるひとゑ
へきを入道の此女をそんさいあるも世の
またゝるも作ものゝ文体なるしもほれハ一かと
たかきとゝ人のほとなとハさてもあへきを

あてたかきとし変化乃女ならよはつくし
なそれをかれんとて作りし明石入道か娘
と源氏の男子ちうちゆうさ後なれて
ちかくなよりね
私此源清和の官状をかきくれともえたれ
いまゝし画光源しろくいきに総つ杓
り簡をくりよ要し

心乃ちかうち涙

秘
海とは夢乃事よいりしも落涙有
上をいふとも なみに也之川あるよもとよ八
さる也

夢乃うつゝなるうきはしらると

河奥入
世中ハ夢乃うつゝなるうきくしうち
うつしとて物とこそ也之

寿
川ある世中ハし川あるてこそ夢なれ
とく川ふるひらしるを盛くし

ゆり乃ちとれあさを門かせて
　源の氏之
かの川しほく
　明石巻よありしませ
ましかきゝ河のせゝろ
　明石上のひゝきを源のとふらひ合せ之
いかなかりのゝひきくしきん
竹　葦てれ　菫流乃体之
む　一本秋さくらしらんと覚ととゆく八

奥之くんしと日体之ねれての秋の心
之河海よハ葦の字よ秋とも不書之
秘　河海葦ニし花鳥奥之いつましも面白きれ
ち表紙よハひさとくしとあれ秘ハ色之
船過乃体之
扎秋さとくしれ義を月へし　三十如哉
まつ君乃流ととかと
姫君れ河りさ海くうりのせ
ちくハかく傳取ちまてし

異
大かた盛形まては物まうてとかの柳
尓みとまりしにや
秘
源の上臈しきさ給ふは佐々木ゆかり
しよ物まとまいる事はおほく仕之
ちかき御かつらとれまとにおりまゐらう
りて
永二十年よれ勝おし潤とらへし浮舟の
人みとしあれはこそきさ給まてきこへつ
おとゆきうりして大井まては人ておはす

ゆのしはきこうしめさねと海芥よ八ことれ
給ぬとりし
秘
川寺人おし給さうりて出おはし
又いとけさやうに
大井の里みるもさのしかはとぬてきこ
しめさとみてはなきの略名上風覚こと
國し云々や
秘
ゆきうにてもとしさうへ二十し源氏物語
女とかうゆ心のほし

秘
源氏のをし見てぬやうふハ歌詠にさる
ところしまさ之
まゐるりとおむとりられ
まきハるこ之方の程よるころまひき
をねこゆうし文早下をね八過不及なき
河
中庸乃道理之
殺青之こし私云過乃字能くしめ名れ
心法のひ妙之
おかろきに風んとおきあまさに

源のひさきこれさ海をとめ石皆みなひとる之
大井よまむほとハ何にやうよまそ彩絵
ともん乃まて乃筆之立海ほまて人
りもそ行うふれかともやんよあまつ也
んとおもちうさかとせハ東流のもつ之
すくゆとめみれて
秘
東流へうつろひすん事をハおるまきこ
とに思ひさる之
かやうふかりくあへうーそ

秘

〻夜さむされとかくわさとより狂空の

涼切なるをいへり

弄

まさしく深りなる事也

秘

何しおもひしをいひしか

此世をも思ひとてつなくよ以上とも也

松風まてふりよみかわまちぬなれは

ひしかとも也

むかしつめて事もあり又おもひかしく

入日の光てうましきまてとて文字路

有事を行ふ也

う乃日たなきおとしうせ給ぬ

秘

葵上乃父　太政大臣　摂政也

志りしこゝより始りし後をさに

弄

殿仕の表さしてまつり給し此事也

朱雀乃御位はこゝより始て今上

冷乃時摂政太政大臣成し也

よの川内事をしるへり

摂政より万機を打ゆるを行つるよ口にとうせ

まへハ源氏の流時ある人ともおほかり歟
みかとハ流とよりハ
今上冷泉の年よりもたよなしたまと
と源の四のみこ
秘
未河のある流かいはと
源の未河のすゑ孫にて叶ふまゝに紀也
此姓清源の姓
この御やうにさまつひ
太政大臣の葬礼佛事なとも源氏なか

の字又源なとより也姓はいれもまとへ
もれさとし
姓異なとは式へし
河のまに川そうにもまいるをのつ月日かけえ
見て雲のゐも海ひ
河
令曰陰陽寮頭一人掌天文暦数風雲気色 注
謂天文者日月五星廿八宿也暦数者歴計
月之度数而造暦授時也気色者風雲之気
色以五雲之色視其吉凶候(ウカヽフ)十二風気知其妖

祥應和二年七月卅日黒雲氣一條廣三尺
計起坤亘艮康保二年正月五日白雲廣
三尺許経天亘東西

みちくのかんがへおこ
行 諸道勘文

世ふるへてなかりぬ事とも侍りまさら
関白の御位あらふ源ハかくれしける事あり
ら又よそて陛下まておそろしき雲みゆる盛
へし 洋逆なる之 又事ともいはまほしき

事成色し
うちのたゝれしあん
天下をきやうきぬ事を源なまよる
らりしくえんしとせ
へのきさいの宮
秘 薦雲せ
ヤヨヒ
三月よハ 弥生之
いとひをうけて抽らくも
今上 答の 桐壺れとかてよおほひあるハ流

紀のまてさのし給ひし也里さりたか北
殿ハれんはさてふるきなとさき御
なる落葉もし一しかるしきめの事
こしハ外もとのゝまし給まて
秘
后の御網之上ふみつき秋之我かた命丸
かきりを知るかるんとハいふや
弁
落雲卅七歳ハ女の御はしむまて
命乃かきりとたのみけり
くさの事なりとし

弁
前坊はひ上臈しく威あり
うはしく御ま威おりもとくあり
む
いつも遠例ゆちなる之
秘
うかくとしころさ御せ
河
現御無 現心万 現人なとあり 日本紀
三十七にそおはしける
秘
落雲乃わさ之
卅年の重厄此物語よおほし女共て
しむへ（きこし）

たしくれしみとこもつきをね
冷泉乃れ公の中と
清き世行へき御とし御んに
秘　主上の御座
国主上の御肉　秘　此方一夜
あれくしうして
むさしほつひをとよみけさ完し
終しつゝみるや
御使しゝかとぞや

くとし此事あらりこりまさきて立る
事もありと病の恐しきよつき
てゝ　勅定あつくて
御一承こつれ
此さのまうりてそれ所法なる所は
ありしせ
此様は此子やし
趣おかよりくれわせつ成し
かさりはへは　秘　初あく還幸し

まかきまくせ世のゆくへも
秘 后乃御心中也　當時無双の人也
此薄雲ハ先帝の御女后なれハ我か
も后國母として實よりもなひきさくせ
心乃うちにハ何ことおもふくまによせまう
私 芝ハ此心のうちに源の密通事一つの
御思ひ也まかきまくせてなひきく人
心事によ物を思ふ事しらぬひかゐまし
きこしめしまうし也

花 六条院の御事
あつかひまうしの
きこえさせ給
ひあるへし

うへの萎のうちよそかなる事の
私源乃御事を萎にて知れぬ事と
うたかはしく思ひ給也
冷泉ハ源ト密通によりて出生し給事を
きり給ハぬをいとしあめつらねせ給その
思ひしも哉くしく薄雲の御おもふまゝ也
おとゝハたゝはやけかくさ悔也て
秘 太政大臣の御事也
源の薄雲の御事を聞て心さし深くか

庭りの虫となきさ人のうらみをおもふ
まへせ
人志れぬ河なれとも
む 女流し源氏とれ中のまし流れ由ひま
こゝろおもしをしぬりつゝすらさ人
好色くし九年にかきり上筆しまいさう
思ひとし
流れ末すのかにかりて
落をれ中すのとく源のかりて流れかつさ

まとひまへ
月まろなやませまへり
是より以つう女房乃用もつひ方落
をいはしをこかひあひ成へし
奔 かりしかをきに
精子無毒病者乃目知らし只かろなき
ねをとしもろへし
秘 精子元毒病毒て今れををに絶れ
まてもなし只不今をい成へし

河
聖武天皇神亀二年柑子従唐國植
種結子 又本草云柑子元寿云々仍病
者宜食之

院乃御ゆいこんたかへと
秘
后の源氏中行事之相違乃御遺言之
河
寛平二年勅左大臣源融関白事暫依
病有親事如故寛平遺誡云右大臣已

も
夢死言而無験
是ハ故院乃御遺言よりて源氏君御後
とまりおほ事を女院の御心に自ころあれ
しくまうけ行し事とはのへ乃院也
いかなる人あはれよくらたかしく
かうりれさゆるよありて謝せん不知ころに
たしよと之
秘
れいの人もきこえて侍り行のとかさのよさ海
源のさゆる

む

源の氏後よむせひ紅くれけんとこ申

紅をぬく

おもかりしを然よ以きこさ海よりも

源氏ろ然よ以きさ海を口おしく見え

いかしへら氏氏河わさ海

ひ央みしても河うしくおき満さ

氏氏さ海之海して氏然氏内よ見えとすの

氏ていよしかおしろへし

ろくしうぬ身おしも

秘

源乃詞

たほきおもし乃かくれ紅ぬをとれ

これも大やまとの源あを源氏ろゝ家

よたしまへまで

又かくれさせ給は

薪尽乃かきりの哀成事也

いとゞしひるまのきてしいろやかなく

薪尽ル涅槃のさ哀也源氏君縁ありて

此涅槃よりおもひよる也

河 如烟尽灯滅 法花経 論衡曰人之死也猶火之

滅灯滅而燿不照人死而智不慧

かなしき事を

源の心

わりこき事乃ほとしきこゆ中よりも

秘 是ハ薪尽の因縁を云り哀事也

かゞりけるとかせて

秘 権不背の差別有之二有権威をある

ひ給ハさる財借之

囚かりけるハ権門にてもる事をこよ

ハにそわ

河 豪家 有千人卿謂豪 史記注楊冠子曰徳万

人者謂之俊徳千人者謂之豪家徳 百人

者謂之英之

世の名しらしも盛へき
諸人の上を棟梁のみさんなそ
くごての名ことてし
秘 秘
毎月の抄ハ花いやし花ハ香のき
ふくむまよろしハ人のすむまてのか
ひて抛へをしてさそ名字
かゆしくハしもおかさ
いかめしら人つしら

色よりハ昔れのきハ世にかとし
く名関のもしさやうふゝ人ハ浜り
よ此葉雲ハさやうすめと云也
もとよりれあつて抛
先帝よりほさいわらお抛盛へし
はかさかりうぬのみて
太上天皇よりおほせられ封をつけ寛喜八年
官年爵ま限あつ事く又中宮にての時も
ぬしに仰つきかきりを

人これを幸しみなく寿進しとうせらる
事成人し武　堂塔あまつりまさを上代
の人乃きしも人よまつひをとめて世に
よ見ハ御ハうて宝をはてれ封の
おほくもとりて功徳をしとゝせのまゝ御流よ
つくさかりありとハ年宮年爵とてささ
ままつる后太上天皇と申し給ふ
たさあらそはつるみも
此寿進之

殿上人まとひとりたまふよしたまいりてし
記　天下諒闇事也　某日　秘　服(?)也　諒闇也
もあくなきさ甚それたりけり
秘　天暦八年母后の事をゆしてし也
河　村上御記云天暦八年正月四日母后崩　九号(?)
今日撤尋常御簾改懸葦簾以鈍色細
布為端昌(?)額
二条院乃れまつ人れゆて
秘　源のむり出まつて

としつゝはと
おつ草れ好之のはてし心あひと
ちるまハ是海よさけ
人乃こゝとあ川へ多れハ
花ほともまて花しあまて人
の思よへきし花ゝと之下の心あるゆて
流行んずめり
あまといよさ夜成へし
山すはの本志ゐ

秘
峰乃積之　辛日
岡山さゝしハ山をこえとのさゝ之峯之
雲乃ちとくもこれつゝよひをとまろをとゆけも
流あこ海ゝめ流られと
私
たりしろさ花紅葉よても心ハ海のまゝく
花しるまくしやされとは雲風のものまかれ
ひてよひの風の物哀にて物のて貴
こ海まつゝ之れのおりしれ成さ海せ
源
入日ゆまと花よくなひく薄雲ハ物思ふ神ふ

ゑやゆつる

秘
源氏もいま鈍色の服を着しまも
同眼前の袴をとりみへり

人きぬ所きれハかひかし

私
かやりよおもしろきあそれと今の袖を着
なれハひとしきまて　若紫也　弄月
同念誦堂まてひとり泳しきて

流まさみとるて
四十九日乃御事みとるて成へし
これ入道の宮の御きゝのさ

秘
先帝の后也

弄
薄雲乃女院ハ先帝后也
入道乃宮ハ薄雲也此女院后腹女院
見ゑ源
はさしの御いはひの師かくゆかてひきる
僧都故宮よて

河
推古天皇御代
設定置一條
堤

再條数茶園にハ多し先人帝の居られし
落雲又今上冷泉帝と称したまへ流れゆきよむ
ゐまゝせ旅宮ハらうと雲也
とし七十つりくく
條数七十斗やとし
今ハをつりの津をめをとりんとてことりつらつ
後世れつとありきとをんて公請（クジヤウ）を辞
して義居之
宮乃御事なり
秘　落雲御事

落雲崩乃事よりて流るゝひめ也
この比ハ親りもれく
秘　流数條れ事せ
いまハよゐまといてゑ入りく
東居之　むよ并れ條ハ二間よ作るゝ也
流数條乃事せ
ゐるき御殿し　秘　りもの御殿しや
こたいようちしハゆき
古（コ）弥（ミヤ）　ゆめうし　ここ海也

いとそうしさて　傳教の問
かゝりては清こそあれや
みゝの由事とか光てめさんと云ぞ
志ろし給さぬよ
秘　是上の志ろしめさるを以わ
テンノニヨ
天眼乃たそ何しく
河　天眼　秘　河花こハてんげんとうり
同こハ天の眼とはり又眼ハ肉眼天し
恵し　法し　佛しや

む　天眼ハ五眼の一之帝天人梵天王以眼見之
あにのやくらハ
河　何益　何の益かあんせ
かとけもむことあしとし
正直なるぬ事をいふ
らん何事あらん
是上乃御作
法師ハひしりを以て
秘　寛算僧奉此事かとそのぬ乏人恭

弁

一勤何事とハ定りて如寛算僧正
かゝるありしをおもしろきやうなれとて
もさしわる事也
私僧乃言事これすなはち事とかれし
さ候へしきとも文法師ハひとりとして
も云詞ハさうら僧始めて法師とハ大きく僧也
名ひとりもとハ世をもてなる僧名信人也世
をいふ名をのきをハひとりも僧をはお
流よりけまハその僧名

いろけなりし時より

秘

これより上乃名詞迄文字幼なる頃
まりハ時より公へさてもきこえされ
しみハましき陽仏事とさうて事も綺節也
松うこ亦ハ僧拾をさして僧なき
あなしこ

秘

僧拾の詞
僧乃いさめ始よりつゐにきこえれるなき
もとに

俳乃はな咲りよかりのあさきを
こにとあり　トアリ
真言　秘密事や
ちれハきしうこゆくゆきさ大事(ダイジ)し
こ今参をんと寸る事の沙汰とまかせ
色たりゆしみし流
秘
桐壺や
こさいの宮
秘
薄雲せ

世を海つわこちの釣あそし
秘
源氏之
よかつぬ事にやおりいて
法師なれと用捨の詞をつゝ足
かろたひあつし此身よハしあまのくあう
何
懺悔十きえ
俳天乃はきを何のよかり
秘
わさしおりよ参しうき　本日　紀之丸
ひけの心何思しめてハあえゆうし

まつ参らる御事
これも事のうへ奏する詞也
抄 承香之主上をさしてやさらる也
故宮乃ふるくおほしたけく
抄 落雲也
法し此世よ之はなれ給しを
男女のあ此事あれ也
おもふさま海のつくよはなり給ひし時
源氏の人道君の時此まつさる御離れ
れゆへ天のうらめはつらく落雲此道也
おそまて冷泉の御弟にしらさ給く
給つまりけりと之又源も是れをみて
しとくして儀むよ御務の事とも給
まつとせ
流位よつきおりまつりまて
当今は御位の時よまてその御弟を
をしとせ
そのうけ海りりしさ海よて

を

當代の御つかひ御らたハ源氏の御子よりて
まし御名事之
御ましくよ御心られしきまり
給の御はかりさ御然之
とりり御いくも
さりく御事あこさ之
まみそりしつると
さしるこて御出まうを遲難と仰敕
恐怖して御前を御ゆりさんと出之

然まさてる下あ御しは
私
勅定やうく奏しうると之
又この事をさりてましつるる
はかりよ我し御人はんをもとるよ上れお
それゆへをは御見之
はりよりたりしと
又仰敕の詞
さるよりをるへいとれそうかう
今やりの家事成まうて仰天れ照覧と

たとへハいはく
てんかんまうりふさうし
河
天変也
秘
例よりひさう天変のまへよりおこり
私天変とハ虫ハ日月星辰風雲等
よろひさう事也
このけなり
私此性也和
何事もわきまへさせまつへき時分にあって

とかをとき志らんなまと
政をとくらん志居之時をもつてかたし
としと理也
よろ川乃事おやの法代より
諸事昔より先王の例をまもりまつ
すへ私も子親れをさしてもつれ
門ハ放浪乃弟子なり実ハ源の弟子也
くるや
らんハ差乃やまよ

主上〔冷〕乃御心の中も
たとへはかく人ゆへ
子ありて位よたいをうすを悪き事も
御らんちかよはせても
源をとゝ主上の御覧しては御心乃うちも
故宮の事をおもひよせて
主上はかゝる事ともや給事を源ハ生れ給へ
故ハ薄雲は御事をおもひ出る御流
うとむかりせ

これ日式部卿のみこ
秘 桃園宮事也 弁 槿斎院ノ御親
世ハゆきさぬるやあらん
秘 勅定也 源ハ第一してと
二宮乃おやさん
秘 故宮ハ薄雲之位をさり給ひし事を
御源也
いとおもまへき
秘 源乃詞

かしこき世にしも
結句かしこき世にはならぬ事なれ
訓見れみるの世にも
秘
聖代にも性異にはかはる事漢家本朝
二
不可勝計せよ上をみくさあさてまつり
てらしみかや　考曰
河
尭湯負二洪水大旱之責高宗成王有
雊雉迅風之変雖有小異不失大徳
後漢皇后紀上　和熹鄧皇后傳

及成王用事人或譏周公〻〻奔楚　史記周公世家
貞観政要曰黄帝与蚩尤七十餘戦其乱
甚矣既勝之後便致太平九黎乱徳顓頊
征之既克之後不失其治桀為暴虐而湯放之在
湯之代即致太平紂為无道武王伐之成王之代
亦致太平
本朝延喜聖代菅家左遷事以下粗和漢
先蹤不可勝計

侍してとゞりれ

秘

致仕大臣式部卿宮薨の事せいはまとも

諸かさりはの老臣ともせ

かさりもの猶も

秘

かやれ車ハ女ちとのまゝ姫へ事よ

はらすこし萬事地し

つねよりもゐさせられそひ

秘

とこ主上て源と同し素服をて御ま

せは我まよ不あしとや

うへとらしころれかるんても

主上乃れさうの源よ似るとハ鏡なと

御殿人とろみて連て見めし之御無

事ゆへ一しかよはつれし見えまゝせ

いかて事をみすめきこてゝ御し

源へ御事をいひそしてありさ海とも

こしし主上の見しめしや

うらいてきこて行ゐ者ハ色太かされと
ことをはねまりも
私事をうら出かて見えてよさは
ぬてうるも大かさ八事ともあつく
きこしめせ

秘
うらうし二海わりの人は
平生にも終と戦艶よむひれわりま
よとをはやしく見るのよ
天下これ人の治国よハ

源の事也何もかん人不審よハ見えす
見ほるふ妻きこしめかるんとハ思
ひよるも行かぬ之

いぬさうよ書れひ行かん事
秘
蔵雲もふて母も頼事成をとさう
よはさくと思ひ行へきるもいると
見えしめし人とや

かの人々も
王命ぬるもや

かゝる事乃まい　九人乃子係よつて事と
いよくれうくりん
物を志てさうあれ係よわり馬牛れ錦な
ととえつうよあまうかせ
武氏流人不通古今馬牛ニ乄襟裾ス周公曰
秘
物学ちうてハあくさき事とせ此服拝
猪字ちん可拝色せ
もろこしにハあつれてし
河
秦始皇ハ荘襄王乃子として係よ卿と
いふも実ハ始皇乃母ハ嫪（コウ）毐（アイ）呂不韋
と云氏下よ密通して所生ニし　見史記傳
秦始皇乃事河海まうへてうりいとた
ほうりとうけうこのかりも例あるも
私案之晋元帝ハ牛金といへる人
乃子せ
案鶴林玉露ニ五云　呂秦　牛晋
秦虎視山東蚕食六國不知六国大賊
而秦先賊矣何也始皇乃呂不韋之子則

嬴氏為呂氏、所滅也司馬氏欺人孤寡
而奪之位不知魏滅未幾而晋滅何也
元帝乃牛金之子則司馬氏為牛氏
所滅也春秋書莒人滅鄫義正如此
胡致堂欲用春秋法於始皇紀便明
書呂氏元帝紀便書牛氏以従其実
秦始皇ハ呂不韋か子なるによりて呂秦と
いひ晋元帝ハ実父牛金なるによりて
牛晋とも云之趣ハ鶴林玉露にみゆる

秦ハ嬴氏なれとも実父呂氏なれハ
呂秦ともかき晋も司馬氏なれとも
実父の姓に付て牛晋と記せり
始皇紀にハ便明書呂氏元帝紀便
書牛氏以従其実トイヘル是である
これにハ何ゝ入れてありしれぬとも
いろは事なるへし

日おりよふハゆるしにけらんりより不可有

也
陽成院の御母二条后也業平中将か
后よちつこさまゐる事伊勢物語にみえさ
りまて陽成院の御門ハ中将の子と
事ありこれもゑしたまへし津之
さる文字ハなさき蒋雲の女院の御す
覚よかそへて四子一一

秘
家圀よハなき成一一花陽成院也　法力服注入

此事ちと以難用之　私説事ハ深秘之

子細哉　以上秘

関苑當流アヤニこり

一世ハ源氏大納言大臣よなりて（イワセ）

秘　其例河海より見てより只今源と親王よ

おしかてまつる（ここ）

私覚ハ天子乃位をゆつらんと覚え

なり（ー）

寛　光仁天皇　元大納言　宇多後河

河　一世源氏任官已後卿位例

光仁天皇元大納言　桓武天皇　元従五位上

大学頭中務卿

光孝天皇　元二品式部卿　宇多天皇　貞観十二年賜源仕侍従　仁和三年為親王帥帯位

同親王例

光孝御子　式部卿是忠親王　元慶八年四月十三日賜源姓寛平三年十二月廿九日立親王元中

同才　太宰帥是貞親王賜源姓　任左中将後為親王

酉酉御子　中務卿兼明親王　貞元二年四月為親王　元左大臣　正二位源氏

同　上野太守盛明親王　康保四年七月為親王　源氏大蔵卿　正四位下

私一世の源氏とハ天子乃御子姓を給はる也

人のかしこき事にて
源氏賢者なれバ定れる事にせて
位をゆるさんと思し召す也

姓乃はかさめしよ
京官除目之春の除目ハ諸国の所かさと
也祢と任さるゝ事なる縣召（あがためしのぢもく）除目と云也

乃ハ京官をもまて任をし給ふをはかさ
めしと云也

太政大臣よ成るへき
（秘）ここにてハ未任候也　任相国の事也
ふみたり　寿日

みと思しよする事れなとも有し
（秘）位よつきを給んのよく

なといひとはかゆく
源の氏中よ位の事おちせし給ふと

雖く仏あり
摂政乃氏長者しいはく氏みこ為ちの中ふ
生より源の姓しるす源之
何かその流れあしくまなく
摂政の流れむけしを何かんみ氏をかぬ
そしらせ
氏ちかなるをこなひ
いまとこし太やけをもつゝまいりて
後ハ月氏以を国を行ひけりて関りをこ

なひをとしまてしまつまゐ
法務の流れとしくに
遣して源の仏中かくのことく行し
成へし
太政大臣よ成行へきしきをあ
前の太政大臣の事ハ関白氏宣下にハそ
乃法井てに任とゆつりんと勅宣之請
も源の氏川なけまハ彼らく太政大臣
みとおりて世さの流定あ之

志りしとおほせ下
秘 源の斟酌しるゝ之
多くれくるまをひて
秘 従一位の車蒙之ー 年月
ゝゝ ゝゝ 牛車ゆりされて
河 聴牛車之 れくるまをひとく八年事之
寛弘八年左大臣藤原朝臣乗牛車出入
侍賢門上東門云々
左大臣源融寛平元年十月十九日聴

輦車
右大臣源兼明天延二年二月廿八日輦
車
承平二年左大臣乗牛車出入上東門云々
ほうしかうしきれしき
不足せたりいまに思ひおもひを上れ
れ色之
札みこよりのまへく
源をせめて親まい成しそてまつりんと

世中はゝうしろへ
源の公也
鈔 天下の摂政也
権中納言大納言ニ成て右大将かけ給
御事
鈔 蔵人上兄也 弁同
私 参議同ニ 兼官ニ任しけるとみなり
此春又大臣兼しぬる人重服中
任官例阿りて以外うち隠任せさるれ

猶先例を勘へし

いはけ一きハはかりなくんよ
け大納言大臣にかりそうしハ政をゆつらん
と源乃下心之
あま事もゆつりてん

秘
源乃心ヶ御つゝせ
れおほしめて源よ春宮九
源乃息之かくのつのさ海へ侍らうゝせ
よ満きて兆定事とおうしらりと
源のしうゑ春宮ハ御意之それゆゑも

いとおしきこ事せ又ハ上給のちて覧し
めしまつらするつきてもあれしかうす
をもしきんと不審よ覚えたせ

命婦ハみやうけとの

秘
王命婦也
王命婦みやうきとのへさうしれおさころ
をつれよう海りて内をみせとうとの御
匿殿（クヒケトノ）の識よ感うれてたうえへうかゞ
治遺殿ハ御服みてし侍らせんへや報せ

大臣家ならでもまゐくしこ禁の所用

二乃事とり　秘

源の御子

けんにうけてこときこうじめさんと

王命婦乃詞　秘

藤壺の流る上にゆかりちかきひきひるき

きこうし光さんとハ上上のきこうしめさく

き事や

かハゆるしうう事にやし

みちの流るあもうと雲の流に光と

つきうけ事ありれしかとの御ふあ

とそくしめしなをきしもや

一かえちうれ候ふて　秘

源乃藤壺をとうそ候と

藤壺の心おのしれいとしを一て

かうれ源の思しく思うあせ

二条宮乃女これハたゞかしこしとかうき、
秘
秋好中宮也是より中宮の事をとい
へり源氏のゆるしなくて志給さ侍也
私
おかしくもありきはしなくてかなハ
入内なきさ前の事よみたいとけなく
おりませハたゞおかしくそおほしまし
さはよろしと何ましるみえたく二条
宮女御の流をもちれ給へきと思ひ
ありこそと云せ
秘二
源氏わりしるし給さ候

やとこそハあやまれり
これよりいろいろなき事をと申さ候よ
秘
中宮の御へきゝ人まゐりませけ源
もなうこひ申給や
秋乃比二条院よ侍りて立かへり
秘
秋好と八源氏を御里の人めの
やうしめハ朱雀院へのきこえしを覚ん
てかくへのやうかりかひしと
いかし乃事をもかさつひ

源の公之時節の感よりおこれし懐
古の思ひあり又六条の御息所か
こともありへし

流神もめまて
秘 源の也

こ海やゝなみゝひきの流本をしすゝく
源乃勝衰のさ海也
武式君のみこの流布よりて盛
源乃叔父也

世中乃流行きをときとてつけ給ふやう
て流行きんなまえ
弄 下乃心落雲の想佛也
国章不審也
三はらきこて行

秋好の人つてあはれのなそ
せんさいともより
秘
因思ひ多かれんと下よりませり
源の詞也　百草の花のひもとくなの
心あり
河
百草の花のひもとく秋のゝにおもひ
たはれん人なとかめそ
心ありて
花の色々まことにさゝくろをと也

時しりかほなる也
秘
諸國乃中かうともハ大方さる也
むかしの御事
秘
六御息所の事
野の宮小ふちよまつひし
源のふよもよあはれ事也
物のあはれとおもひしかり　源の返
かくれなしにや
河
いにしへのむかしのことをいとゝしく

小町姉

私 かくれぬる袖はもとりけり

林好中家もとこしなきなよとせ

河 ころおりし人を常ふれ露ぬれや

くる花は袖のまつれかつらん

弄 秘ホいふしへれ昔のしり給む用一説

右哥よをよまれ

みぬめてまつしぬこそ

秘 中家をとハ源ハ思ふくうちよみ見えたり

さうせ昔ハ男女の色うてしうちとあさ

さぬみえたり

此林のうちはゆかしう

何かとち源よ見へうる花をいふとて何

やと草子の地よ評してけうせ

色みしくるハとに思ひあやしへき

秘 源の書うしくうの事をさうり出すせ

仏きとに思うあやしへき事なくとハ葉

耀時代のたはし何ちよつまて思

ますりしに化うる好きる乃事よおうさ

筆をとれのませ
洗井よ乳もとけともとをはこれて是しめる
筆子ろ川ろん猶ろ
河 一八六条流息示乃筆也口里ひろハ成海
ひさしつてハ翁蒲雲女院すれ
おろすさみ
秘 流息示せ
あさ海しとれし
秘 流息示ハ洗为よ源をうしとくて落ま之

なきよみう花りきこ
あやきゝ世中てわらしし故らんと之
かりまてとはらうまつり
秘 ゑやうの筆にて書こととも見かをし
まへきうませ
様ぬを源のうしろし多筆せ
もくしらみれもとおし礼
河 むすほゝれたりし烟とひくせん君さ
うけよおりききらきりと

秘

舟木川ハ用ル舟此川ハ時ニ先ヅ其とかく
迄舟きんとハ清見寺の乃事也舟舟
ともつ也

或は清見寺ハ物ともる津あるへまて松の
まいハ絵ともむまとはゝれ舟んやと云也
其絵の筆まてよゝ見へし云し

いまひく川ハ乃くゝ海ひさしつ

舟 落雲の流事まや　河関同し

秘 かききさしくろおもろし

或説ハ秋好中宮の御筆とし清盛公思ひ立
松さゝ落雲乃事とも云ゝ花の

中ころ月のなきにしつゝし

秘 左近の時の事也
海草ありしハ何としせんるへ内心
よおかせし事のかくつらみ事也

秘 うんくしの流よりのすり
花散里七条流よりありしまて
よそし火てみそり

私共前よりききまゐらせしハこよなき十と
おり　説教事
御くれなくなりぬ
覚えりいとしらさハやうなれといふすてハ
むちの里の御わらかといふ源の道源
御をと見んくりとて御らうせしろハ羅
とさハやとハいふ貪著をぬ盛
かくなちうへわれかやきの
海京して天下の政をしろするもとよろこ

ひとハ四つれハ好色ことに御気を
事をれまよせ枕ぬへちとをはりく
いひなきんとてうくの給ハせ
おほろけなるひしれひさうれうしろみてハ
松
たおやかをうりぬよせ此への内の事も源の
書云ふて絵りおほろきさるか御まて出
おて給ふ事よせ中宮をハ我物よて
かりとを給もかりめへよ事せなとさり
なりさる御れ中ぬるし

弄
丹宮の源氏林辺
たおやかをうりすなを
めへしまてうハ源の
下の心うちをの給へり

秘中宮を源の御ためにてもかくさせ給ひて入
内させまいらせ給ふ思ひ入らる御事なれ
とく事の次第思ひ知れるさせ給ふ

わすれとふに

秘たかしめし思ふへき事とせ

もろしりて

中宮乃心

さりやおかなり

されハこそ何のミちとかく作られぬると

さて斎きしきをとりて源の別事よりは

ことりしるて

いはゝわたりのやうに

源の子おすよいひまれ候

ありひいてにしつへき事の御ためにそれによ

七ハ退体をやく思ふよりまさる道

立ちき事なれはさきすゑよはあきらせ

秘教うへぬれはまかれ人

門名姫君せ後よハ入門あくし其間まち

ことゝ成へきことゝ之
かうけみくとも此門ひろくさせよ
秘
秋姉のわさいくひまて此御氏一門繁昌
すへきことゝ皇子御誕生あるのちとて
見えり年日

河

于公高門事頌
于公東海人其子于定国字曼倩家行
乃破られと又子とも上はゝるありて于公ゝ
いゑく此門をとらてちきに駟馬高蓋の入
ほとふるへしまれ獄のことに十年を
をとこすよ法律おきてるゆへよこ家子孫
あまたを家をおこしへしとひろさせて
門を大きにつくらせして定国ゝ丞
ろり其子永ハ御史大夫まよ如そり御
史大夫大納言よあらせ
弾正を御史にい今の名よつとう かろう
へきれ もは 是ハ納言九卿の女后よ ふち
ますへきを事を見えしりさうと中宮事を

の内容にハ風聲ありハ条々の事
なとよめとまなれハ細馬なる盖よるへき ありなれ
河花 あり の義になくす 秘哥も
義可然と
関千公ら源徳ありし以来て源の秋好か
とらうへつし給ふ法住なれハ明石の
姫君の人々とハ湯報ありんと見えを
似まやうかきも 無用にや
何ヶ源氏なん後にも

源のたつきぬ後まて 此一門は見え絶え
之源の流子孫なれハ秋好の御法に
よりて一門繁昌をんとや
こさはいて 笑つきてや 笑へきや
嘉あしと家まて
源のかりくしかや
たかくしき 実しきなれ事也
この門ゆきらふ時しれむもみち
秘
六条流はなれへき也 哥月

私こしかちらゆきさりりの時運将至
ろりくまされそし八つり八子孫の繁昌
后大臣をあしへもちあしとあり栄花の事也
それハさそしときぬまかさしかありぬる
春秋の興まて心をとゝむるかな
かしてみくさ事なりと也

秘
心よりりいろいかりけれ
古来未定事也
おもしろきる勝劣あらしと云事也

まろしにる春の花れかしなよ

秘
河海石季倫金谷園并二喪の句を見る

河
まま　弄日
晋石季倫居金谷春花満朝作五十
里錦障逢春不遊楽豈是元心人

冬天

天皇
内大臣
大織冠也

天智之
万葉第一云　天皇詔内大臣藤原朝臣時
競憐山万花之艶秋山之彩
額田王以歌判之歌

冬こもり　春さりくれハなかさりしとりも
きなきぬさかさりし花もさけれと
山をしみいりてもとらす草ふかみとりても
見す秋山の木のはを見てハもみちをハ
とりてそしのふあをきをハおきてそ
なけくそこしうらめし秋山そわれハ
私これハやまとうたのたいに秋をは
さためて以下まさり

やまとうたに秋のあはれをとゝめて
む　春はたゝ花のひとへにさくはかりもの
のあはれは秋そまされる
秘　弁　木卅ウツ川弁は古今にまさる道
けしよはさて見人ますよめらはいかゝ
河　自古逢秋悲寂寥我言秋日勝春朝
秋詞　劉禹錫
大かたの秋始にハらせしもみちハ

い川まとゝをもし
春秋の思ひこそしれてまさるかい川ほとよ
清をつらうはかは
秘
春秋よ思ひこをもし　此仏滅へし
いはそこにから清心よせ給へうん
秘
六条院四季よまうちて清るへき仏道
せその中にていかさこよき海せまよ西き
みつと清心とうんをそ
いとまここしにくき

秘
大事の世香と覚しうる
新宮乃御之
清いへきここしさうんも
此世事の住うんもいつと思ひめ
らし此滅へし
衛ていつ思ひまさきうん
中宮の清世香之源氏さへ思ふさとめ
わつもりて承りと
秘
我身さうみさし仏ろまよ八方あゝさ
こさ

とせ
けふ川もなかすかり
花も涼の思ひさゝぬと河りもとう
まて川ともうぬるの秋也
なやしときこし夕かそ
河石
川とてと忠しられハあ秋も妹
のタるあやしるまさり
蛛乃車のあやし犯そと風なるれ
萩吹風ハ高ふ身あしむ

桃川女
川とてと忠しく　寿月
寿
卯洞林鐘やいはまてこころそき事よ
せての秋るかほ上にあしろしく
くろあうきし秋の露われたまの
桃
春れ見ぬ乃くれなるす秋子れハ心
よせのあかりしせ古事なす色岩と　かく
いひなせるむ林鐘之
武家芳坊も八月よりし鯖やれ見ぬ
も鯖なれハさし　かくの秋まやとし

つぎのひ舟にて
源乃こゝろ様く風流か浮きねを
よみけるとぞ

源
君もさはうれしとかこせ人しれ風我か
みしか秋乃中の風
浮ハとハ浮かぞや
哥ハありてハ來しも肉しハ梅をといかれと
思ひつゝはさてハ浮心よさやうなあハ
まをとりハさんとやトの心ハ思ひの色をい

さてか浮かりしうた
思ひうきこなりくも
梅の冬ハ去年のひとつきゝおりく成かとハ
中まよ夜も浮きゝ宇とほのめか
しまにりて心えをし覚て
御いくもうさき

いつこれ浮いくか

秘

いつれも人々しるしへきことも心得ハ
ぬこと

これ川かてこゑあけハて

秘

弟子迠せ

源のこゑものひこゑあ給ハて何やかやとう
らみさられ洞あるへしと弟子家
てかくこ

いふもこうしまいとも
源の御それ打見より打られしもの給へき

と秋好のうちみて心見しるとともとく
ままわの御もしうぬ事しと思ひ出て
御つゆく家しと思ひかへしてこそ伝ふ
心はさゝおもうれ大将しなりめり

秋好の心
源の御それうちもみけさころさ御方へ
あるしきなりとも秋好の御ゆうハ源
さく洞へしうれとせ

やゝてもきいり

うしはし渉しより川入さ道

はさ海しうそ

秘 源乃図之

まことに心ふかき人ハ

む 源氏若紫外紅おきますと自秘なる道

秘 真実ま心ふかき人ハうやしにはさるハ

図たいつしゆぬねとせ

はうらんとてもうり行ぬ

は はしかうん人の多あよハつてかちてはし

きハはしみおもし志うきん

弁 秘図皆承川音之

私云 菊乃綱よろしいまよりハはきせ多な

よつかんとてわかりゆめとはりか

余りの事よりにこ多なよにく

みゆくハつかんとさの形よ図之多す

秘 扶姫しうちへ川入所へハ源て退出す之

流よおひれこ海りさうさえらと海しらり
源の泉ひれとまりさう逃らこ海しも秋
ぬれ候
御声も移のうつり香
河 茵 詩 文茵暢轂ゟ 小戎篇
柳かえさしよ作らせさう
河 梅くをゆてられをよにおせて柳か
枝よさうせてしるか
秘 梅か香をさくらし源のうり貝より

流さ海をいわり
も 源氏君の万年をうる年れ初心
まきぬをおあていわり
武の流音の心ハ移ひ年之源氏さ海也
梅うと接れをよ泉ひて柳か枝よさささき
身の桃如之面白く成音をとれりこし
書いふれうり給く
是上乃おハよろ栄盛へ
かうしあるうちうる

秘
源のうつれる事をいへり
まりあさき事に心のとゝめかくされぬのこ
まきうとし源氏うつりおかまし
これハいとまをうなき事也
秘　む
秋好に心かけの也
秋好中宮に女ノ子なれ事あとしかの事
何のましみ事をやきなりさとしいへり
おう源しりつしおもよりさハおなし源かり
け也へし

花　秘
斎宮の女御の御事也
源の心に秋好をおもふ事を薄雲に
かよひ行し事をおもふ源に薄雲
の事ハ哀つしかりよ事也されとこれ
れいの一八条よりれんほにておもわり
あさよゆかりてかさもなへしとあひ
薄しの也　妻日
おもひやりしたまきはしの
む
まうきゝ時の事をのまゝ也

秘このみちハうしろやすく

秘 身こそけぬまれ好色の人ハきこえ色好て

出来ぬめり摘之うしろやすしと 弄日

秘 薄雲ハふかく何のまし事なれと

もろきほとの事にてはやむらあるき

今秋好ハ薄雲にふくてハうしろ事之

それさへきこえ色好あるハとのからぬや

うき色をとうしろやすしと源氏なり

おほしめすつる

このみちハうしろやすしといとさは姫

若紫なつかひをさすむとありはやかわり

女御ハ秋乃なけれをとまりほよいくさこて

けりもくやしう

源氏はけのくまつまてもよのきさきまで

まみけのくハまろハしく含しく
たかしらる秋好の御事
つ猶もりそむやかまと
源氏のいよし中宮を法子なくしき
女君り
源の葉への猶子や
女御乃梅よ
光まて梅好中宮とハいへり
君乃うゑのあけはれよ御しめるへら

関乙女ノ末ノ去秋の第二九（中宮の御事 ようこと
秋 紫上乃去をとかくれこあ筆歎詞よ
まとみたり 奔日
あそひおとしてしかるを
おもひつり世をやし四ヶ御大やまとき
くしのひまよ云さ身さなさりかる源乃
たかまとまと
ふさりしゆね
河 不祥

うれしあ
むまりしき八
けひしき之
君のけんを
まきあ君を
とふんありし
雲上まきまり
給や

いそ申事ぞしかと

松 私ハひれましにあそひまゐるうしと

おまへも雲上の御すかたやむ宮遊

それゆへ花もまきてかゝるひめ

桜 なまよすとハ雲上ゆへ山にとりかへて

こはりゆかしき

松 私事ハ大宮をさくら住ま八

今まわれハおまへさまハ山にとりか

いせんと思へと雲乃さしれるん

ともよゆへまつこゝろといへかえはなら

かりそめ 松し義花へこそれ

山住の人も

桜 御名や

末きのこ

清き水にうつろふかみさまりほと住みなれきしかりか

いみきさや

世中をおちきれ

桜 御名上の事し

あらかしもおもふへき

秘

明石上の事をもし給ふ事なときこしに
くるしハおほせきらき事とて源氏のおほし
私おほせられを御なかしいそくあへのおよ
てハいやしき明石の住さく思ふもと源氏よハ
さふみの事とも見えたる

いとをしく

給とか見えしさまなれめる

さみあるも御に

秘

大井里也

秘

いとぬくらさらん事にてくるよ
なをさりれへをきてうたかひ給ふ今さ
給それかうさ恥れさ給ふ
ましてみくそてまつる
明石上の心源の住よさへあかれそ也
給ひて明石上のまうし源をとし心をもよ
してしいれり

秘
はつかりはちかきみれけとられあさかぬ
姫君のいてきたるよしをきゝけり
又あさてのとしなつハつきの盡
されとも大井まてをくりおハすか　何
さうめかし思はれ
ちらんまの行
源の御花上をなくさめあはせ
秘
かゝれ共もの
八月の末つかたハ自然の篝火なとと述

私
大井川鵜舟の篝ハ八月まてともしつゝ
又何乃月かりかくしてこしれのあるやう
遊の中水成一下
かゝるまゐる志をし海さしきしハ秋つか
あはれなり
花
在御花あくかゝういさり火あまもと見られ
うす事をさかり
秒
御花まての事也浦乃いさり火あまたなとあるさ
海人ハあつかれ之女へきなと御花上ハ

月よしとて明石にて見しゆへよあつか
よも思ふまゝにまよしとせや
弄
明石ふくれ事也
明石上
いさりせし影わすられぬかゝり火ハ身のうき
きふねやしたひきにけん
秘
此哥古来称美の哥也明石にて相思
ひし火ハ大井まてはなれす同しさまに
又我身のうさを海士のいさり火に思ひ
そへてうき身はなれぬなといふ事

ことのは感あり
弄
此哥殊勝也以下秘の義同明石之八
月の比ハ今宵よ海の事ハかきりなし
河
廻嶋　日本紀　参　万
孝
おもひきや都かれなるさとにとまりて
のまのかいさきいさりせんとハ
おもひそ海つれ
秘
まことに明石まてのいさり火大よ似之
古注
はきうつゑきさのおもひをさて揃ゝや　扎

くりも大乃気ハはハけり
碧
かくり大の気ともあのよひきハあり
まて下よりゆうるまきり
上二葉下のたよひハあそれて下にあらそ
いふけれはうくとハ大れ之のさうゆう
ぬ风へ｜下の思ひよくてはしあ
さくうなるんせ
栂
花鳥流線へ｜ゆ右上あくいひ侍り
し家のれ下の思ひハあをさりぬを

落句おりして
関源のふきさ思ふとこわあへかり
大のけハ侍らまうんとや
身乃うきこみやうてらかひろはまぬ
石れ上のよあれハ源のくさみあるを
全きしうきこ柳てをしか一｜
河
うちくへ｜思へてかなし世中をるを
うき柳てまくをうあまん
栂
うちくへ｜
弁川宰日

も　　秘

源氏の君の流儀をうけつきしより世
のよしみの之
花道の君乃いて是ハ源の氏盛に
武門の右上のふく源をうしみちも交
源のこゝろもうしこと絶てもとに
といふ流派花道流とよし
大かた押つれ
源のけ流ハちと流いと悔あらせ
多りこと事ともに流儀と取りく

法の雅の流堂まて流念佛しのまて
おもとをうれしく大将へもまておくりまいり
まつ事よ女君も思ひまゐらせ候へとも
私筆者の案してまうとふもと
ハおよしあしかきとめ之なとよさ
やうにおわはつていまうまみまゐら
調之